

## 「堺」

寿崎 かすみ

私にとっての堺は、中学生や高校生の頃、歴史の教科書で習った、歴史の中の都市だった。現在も「堺」が存在していることすら不思議な感じがする、そういうまちだった。ブランド云々以前に、歴史の中に忘れられた都市、近江大津京に近い感覚、というのが適切かもしれない。



阪堺線を地図で探し、南海から乗り換えて「路面電車がまだ、大阪にあったんだ」と驚いた。

堺の市内にはいると、私の意識は、歴史の教科書の中の、商人のまち、自治都市堺から数百年をいっきにタイムスリップした。堺が刃物のまちであること、自転車産業があること等々、千利休の時代からタイムスリップした私にはすべてが新鮮で、驚きだった。

プロの料理人が使う刃物を作るまち、その刃物づくりの職人の後継者がいないこと、OEMが多く、商標をとりそこねたこと等々、刃物会館でのお話は、京都で、織物産業をはじめとする伝統産業が、花街までつながるある意味での産業連関がきれることで危機的状況にあることに重なった。帰宅してから台所の包丁、料理用はさみをあらためて見直すと、しっかり「KIYA」のマークが入っていた。東京にいた頃、東京のモノと思い買って、使っていた包丁は、何度も研ぎに出し、刃が細くなっている。包丁も料理用はさみもかれこれ20年、毎日の酷使と、いい加減な手入れにも負けずに働いている。

堺のまちを歩くと、古い家並みと新しい建物が混在しており、コントロールがなされていないことがよくわかった。ただ、筋がまっすぐ走っていることが、古くからのまちであること、田んぼの中の集落ではなかったことを示しているようだった。

千里、高蔵寺、多摩、港北とニュー



タウン計画に携わった方々のお話を伺ったときに、「建物はそれほどもつモノではないけれど、道路は残るでしょう」というような言葉を何人かの方から伺ったが、地割りと、それに伴う道筋は都市の骨格として残っていくものだということであらためて感じた。

私にとっての堺はブランド云々以前に、歴史の教科書から抜け出したまちであり、そのまちが数百年の時を越えて、今もいにしえの面影を残しつつ、当時の産業を残しつつ続いていることはショックだった。

このことの重みを、今現在、堺に住む人々が再認識し、自分のまちへの誇りを持ってまちを護ることができたら、ブランド足りうるまちに変貌を遂げるのではないかと思った。